
掌編集『色彩』

要徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掌編集『色彩』

【Nコード】

N15170

【作者名】

要徹

【あらすじ】

色をテーマにした掌編集です。
不定期更新となります。

1. 『裏切りの赤』

「私と結婚してくれ」

男は、真つ赤な箱を開き、目の前に佇む女へそれを見せた。

中に入っていたのは、ルビーがあしらわれた指輪だった。

ルビー。それは血のように赤く、輝く宝石である。それは燃えるような情熱や愛を意味し、七月の誕生石でもある。指輪に嵌め込まれたルビーは一点の曇りもなく、目に痛い程に赤い光を放つ。まごうことなき愛の証と言えよう。

「これは、私の燃えるような愛を表現している。絶対に君を裏切らないという、誓いでもあるんだ。このルビーの赤は、私の愛の証だ。そうだ、赤は愛の証なんだ。どうか、結婚してほしい」

女は快く頷いた。

彼女自身も、ずっとこの言葉を待っていたのだ。別段、ルビーの指輪を使って告白をしてこなくとも、あの言葉さえあれば、彼を受け入れるつもりでいた。彼女は、心から彼を愛しているのだ。そう、真つ赤なルビーと同じく、熱く、熱く。

「私はその言葉を待っていたわ。その代わり　　と言つては良くないのだけど、一つだけ約束してほしいの」

「何だい？　私は君とずっと一緒にいられるのなら、酒も、煙草も、君が嫌悪を示すようなことは何もしないつもりだ。さあ、言つてらん」

女は小さく息を吸い、言う。

「絶対に私を裏切らないでほしいの。私も、あなたを愛している。きつと、あなたに裏切られたら、私は気が狂ってしまうわ。だから

お願い。絶対に私を捨てないって、裏切らないって約束してほしいの。ただ、それだけよ」

「何だ、その程度のことか。大丈夫、約束しよう」

当時の男には、もちろんのことだが『裏切る』気など、微塵も存在していなかった。だが、それは欲したものを手に入れるよりも前に、その物を捨てる気がないということと何ら変わりはないのだ。けれども実際は、その物に用がなくなれば捨てるものだ。それは物であっても、人間であっても同じことだ。

そして、それに用がなくなる時は突然訪れる。

「ねえ、あなた。最近お帰りが遅いわ。何をしているの？」

ネクタイを緩めながら、男は妻を嫌悪に満ちた表情で一瞥し、大きなため息をついた。男は、もう妻にうんざりしていた。毎夜、毎夜、帰宅すれば決まって先刻の言葉を口にする。あれだけ燃え盛る愛が、あの時は確かに存在したはずなのだが、今は死して数時間が経過した死骸のように冷たくなってしまっていた。

「あなた、まさか私を裏切っているの？」

男は何も答えなかった。妻の言うことは、正しくその通りで、もうかれこれ数ヶ月前から、他の女に靡いていた。その女は妻よりも高貴で、美しかった。今の妻に劣る所など、どこにも存在していなかったのである。新しいものに目を惹かれ、またそれを欲するのは至極当然のことだ。

「ねえ、何か言っつて。もしかして、私は捨てられてしまうの？」

妻はいよいよ語気を荒げて言った。彼女の面は醜く崩れ、ぼろぼろと大粒の涙を流している。だが、男はそれに動じることはなかった。興味のない人間が泣こうが、喚こうが、そんなことは全く関係のない話だ。

「あなた」

男はとうとう耐えられなくなり、薬指に嵌めていたルビーの指輪を絨毯の上に叩きつけ、叫んだ。

「黙れ！ もうお前にはうんざりなんだ！ どこへ行くにもびったりついてきて、少し私が遅く帰れば裏切っただのなんだの。そうだよ、私はお前を裏切ったんだ！ 他に女がいるんだよ。お前なんかにはうんざりだ。さあ、気が済んだだろう！」

「どうして、あなた、約束したのに」

「黙れと言っているんだ！」

びくりと体を反応させると、妻は俯きながら夫の部屋を出て行った。夫は、どつかりとベッドの上に腰を下ろし、いかにして慰謝料を払わないでおこうか、と考えを巡らせた。この場合であれば、どう考えても自らに問題があることは痛感していた。

しばらくの後、部屋の扉がノックされた。

「ねえ、あなた。最後に一つだけお願いを聞いてほしいの。扉を開けてくださいませんか。もう二度と、あなたに付き纏いせんからどうか、お願い」

男は黙って立ち上がり、扉を開けた。

「最後の願いとは何だ？」

妻は後ろで手を組み、もじもじとした。

「私の愛を受け取ってほしいのです。この願いさえ聞いていただければ、慰謝料だなんて必要ありません。だから、どうかお願いします。ねえ？」

なるほど、男にとってこれ程にうまい話はない。

「良いだろう」

「それじゃあ、あなた。目を瞑ってくださいる？ やっぱり恥ずかしいのです」

男は黙って妻の言うことに従った。どうせ、最後の接吻なのだろう、と高を括っていた。その程度でこれからの追及を免れることができるのなら、安いものだった。

だが、男の負うことになった負債はあまりにも大きかった。

しばらくの間、静寂が部屋を支配したかと思うと、その次の瞬間には、男の叫びが響きわたっていた。男の心臓には、一本の包丁が深く突き刺さり、男は呻き声をあげながら倒れ伏した。胸に突き刺さった包丁が男の背を貫き、男は更に叫びをあげる。心臓の組織の一部が包丁の先にへばり付き、ぴくぴくと痙攣していた。

妻が口を開く。

「ああ 赤い、赤い、赤い。ねえ、あなたが言っていたわよね。赤は愛の色だって。ほうら、あなたの体から愛の証が沢山出てきているわ。ねえ？ ちゃあんと、私の愛を受け取ってくださいね。これが私の愛の証なんだから、忘れちゃあ駄目ですよ」

体から流れ出る鮮血が絨毯に拡がっていく。白い絨毯は真っ赤に染まり、血液は男の叩きつけたルビーの指輪をどす黒く染めていった。男は目をいっぱいに見開き、苦悶に喘いでいる。

「あらあ？ まだ足りないのかしら」

妻はそう言う、懐から更にもう一本包丁を取り出し、今度はうなじ目がけて突き刺し、そしてそれを抜き、次々と、体のあらゆる場所を突き刺していった。首、胸、目、耳、鼻、口、指、掌、肘、膝、足、爪先と。内臓があらゆる場所から飛び出すと、妻はそれをもまた切り刻んでいった。一つ、一つの臓器を破壊する度に、体の器官を切り刻んでいく度に、体から、血液が霧吹きで噴射されるかのように吹き出す度に、妻は恍惚の笑みを浮かべた。

そうして男が絶命し、穴だらけになった頃、部屋は紅の海と化していた。妻は紅の海に身を投じ、呟く。

「ねえ、あなた。私の愛に包まれてどんな気持ちかしら？ 私は、

とても幸せ。ずっとこうしていたい。でも、そうはいかないの。
この愛の証は、いずれ黒く変色しちゃう。その時が私たちの、本当
の終わりなのかもしれないわね。そう、さっきまでのあなたみたい
に」

妻は、黒く変色しつつある海の中で穴だらけになった夫を抱き、
延々と笑い続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1517o/>

掌編集『色彩』

2010年10月9日11時44分発行